

〔翻刻〕 豊嶋十郎筆 『高安流仕舞附 天』 (一)

飯 塚 恵 理 人

はじめに

本書は、高安流協方として活躍された豊嶋十郎師が書き写された高安流のワキ方の仕舞附である。平成10年に亡くなった豊嶋十郎師の訃報の記事を『能楽研究¹』により挙げると

●豊嶋十郎氏

ワキ方高安流。10年5月4日、肝不全のため市川市の病院で逝去。享年90歳。明治40年11月25日、高安流ワキ方豊嶋一松の四男として広島に生まれ、父および西村弘敬に師事。豊嶋家は元浅野藩お抱えの能役者の家で、長男弥左衛門(金剛流シテ方。人間国宝)、次男豊(金剛流シテ方)、三男要之介(高安流ワキ方)、四男十郎、五男永蔵(高安流ワキ方)、六男文二(金剛

流シテ方)、という能楽一家。日本能楽会会員(昭和40年以来)。『金剛』153号(平成10年9月。実際は11月発行)に追悼記事。

となる。本書は天・地・人の三冊組だが、この「天」冊の奥書は、

干時文政十一(一八二八) 戊子年正月造書

高安知実

昭和六年八月吉日

高安流 豊嶋十郎写ス(蔵印：豊嶋蔵書)

『家傳集』写ス

となる。ただ、ここに記されている全ての記事がこの『家傳集』によるのかどうかは、『家傳集』が未見であるため明らかに出来ない。豊嶋十郎師のもとにあった資料を元に筆写されていることは確実だが、この原本は豊嶋要之助師

が広島の原因に被災された時に焼失したと伝えられている。筆写された年代は新しいが、豊嶋家に伝わる脇の型附として貴重である。豊嶋師はくずし字で筆写されているので、本稿はこれを翻刻し、掲載することとした。なお、今回は(20)《安宅》までとし、後は次号以降に掲載させて頂きたい。

(凡例)

底本に忠実に翻刻する事に心がけたが、読解の便宜を考え、以下の点について改めた。

- 1、旧字体は原則として新字体に改めた。
- 2、私に句読点を施した。
- 3、豊嶋十郎師は謡曲・狂言本文の引用と考えられるものを「」で囲んでおられる。これはそのまま踏襲した。
- 4、能の曲名は《》で囲んだ。
- 5、底本の書き入れは○で囲み、その書き入れの該当部分に示した。
- 6、底本の作成の段階で、最初から意図して小さい文字で書き入れたと考えられる部分は□で囲んだ。
- 7、底本の墨消ちとなっている部分は■で囲んだ。
- 8、飯塚が解説のため書き入れた文は△▽で囲んだ。
- 9、丁の綴じ目など判読出来なかった部分は□とした。
- 10、曲名の上の○欄に曲の順序をアラビア数字で記した。

11、本書には豊嶋十郎師による、ワキ・シテなどの立つ位置を記した舞台の図が多く載る。分量が多いため、大変残念だが、今回は図の掲載を見送った。

(目録)

高安流仕舞附

- (1) 《玉井》一 (2) 《関寺小町》二 (3) 《卒都婆小町》三 (4) 《石橋》四 (5) 《鉢木》五 (6) 《谷行》六 (7) 《雷電》七 (8) 《調伏曾我》八 (9) 《道成寺》九 (10) 《檀風》一〇 (11) 《黒塚》一一 (12) 《飛雲》一二 (13) 《葵上》一三 (14) 《船弁慶》一四 (15) 《大江山》一五 (16) 《正尊》一六 (17) 《松山鏡》一七 (18) 《鳥追舟》一八 (19) 《角田川》一九 (20) 《安宅》二〇 (21) 《自然居士》二一 (22) 《俊寛》二二 (23) 《竹雪》二三 (24) 《雲林院》二四 (25) 《望月》二五 (26) 《放下僧》二六 (27) 《柏崎》二七 (28) 《愛染川》二八 (29) 《雲雀山》二九 (30) 《蟻通》三〇 (31) 《住吉詣》三一 (32) 《鉄輪》三二 (33) 《小鍛冶》三三 (34) 《現在鶴》三四 (35) 《七騎落》三五 (36) 《禅師曾我》三六 (37) 《咸陽宮》三七 (38) 《藤戸》三八 (39) 《春栄》三九 (40) 《盛久》四〇 (41) 《撰待》四一 (42) 《紅葉狩》四二 (43) 《土蜘蛛》四三 (44) 《羅生門》四四 (45) 《張良》四五

(本文)

(1) 《玉井》

一、出立唐冠。色鉢卷。唐織。狩衣。大口腰帶金入。金扇。連大臣二人、立所大小ノ前、真中へ出、三足引、「夫天地」ト諷。連ハ仕手柱ノ本ニ償居。「扱も」ト右へ披キ「此由を」ト正面へ向、「猶本の針をはたる」ト云テ、一足引テ「さあらば」諷。さし諷ひながら左へ披キ、出、連ト立向、中ノ打切ニ道行ス。「廣き真砂」ト立戻、太鼓ノ方へ向、着。口傳有。立マワリ、正面向、「我が塩土男の」ト謡。連ハ脇ノ後ヲ通り座へ行、下ニ居。「都に至り」ト一足出。「是ニ瑠璃の瓦を敷ける」ト水行迄見上、「門前ニ」ト右ノ方ノ井ヲ見。「又湯津の桂の」ト、左ノ方ノ木ヲ見。「此木ノ本に」ト目通りヲ見。謡スギテ座へ行キ、下ニ居。太夫小謡、中ノ打切ニ向。返シニ脇正面向、立、一足出テ、「我玉井」ト謡。「其様けたかき」ト太夫へ向、「是成木陰に」ト、正面角掛、「身を隠しつゝ」ト一足出ル。「忍姿」ト太夫へ向、ツレ謡時向。「早打トケテ」ト太夫ノ方ニ足出、下ニ居。心持有ベシ。「伴ひ宮中へ参候ベシ」ト謡ヒ乍ラ立、左へフミマワリ、座へ戻リ下ニ居。曲舞ヨリ中入迄見テ居。間、無構。語。天女出、「各々玉」ト云時見。天女脇ノ前へ玉ヲ置。切ニ天女持テ入ル。太夫出ト向キ、「天孫の御前に」ト針ヲ持テ来渡ス時、左ノ手にてウケ取、

持テ居。舞働不見。スギテ向、「尊は御座を」ト正面角掛立、二足出、「袂にすがり」ト太夫脇ノ右ノ袂に取付ト向見ル。「五丈の鰐に」ト左へ披キ、右ヲ前へ出シ、「乗り奉り」ト右足ニテ拍子ヲ一ツシカト踏。身ヲ直シ、舞台(先)ヲ通り入。連ハ濟テ入。

半開口ノ時、音取り、カン高音ヨリ出ル。

(2) 《関寺小町》

(ハ付箋：V金扇。僧二人。男一人。小サ刀指。始ニ。)

一 出立。角帽子少シ金入。小格子。白ネリ。紫衣。大口。小刀。腰帶少シ金入。珠数半水晶。金扇。連男二人、小刀不指。始太夫、作り物ニ入り、大小前へ在。次第初段、本頭、二段中略、陰陽頭、三段幽玄頭。次第二段ニ子方ヲ先ニ立出。幕上テ五足出、正面向、延、右ノ袖ニテ幽玄ノ心持。口傳。次第、名乗(所)《三井寺》同。連「諷々たる」ト謡乍ラ、立。脇「敷島の」ト子方へ向、中ノ打切ニ道行ス。半着。廻附「先かう」ト子方ニ向。座へ行キ、子方ノ次ニ脇正面向。二人共。立居。連ハ下ニ居。太夫謡出スト思ヒ入聞テ居ル。「あらこし方恋しや」ト作物へ向。一足出、問答。「さゞ波の」ノ打切ニ下ニ居。見テ居ル。太夫「是ハ大江の」ト諷ヨリ心持有ベシ。「実年月」ト角掛謡。「今ハ疑不審もなく」ト太夫へ向。轉ニ離ス。曲舞ニ向。「只今御手を」ト謡乍ラ立、作物ノ前へ行。償両手ニテ太

夫カイシヤクシテ引立、作物ヨリ静ニ出シ、右ノ方ニ床机ニ掛サセ跡へ下リ、「浅ましや痛しや」ト太夫ヲ思ヒ入りテ見。「目も当られぬ」ト座へ戻リ下ニ居。舞不見。スギテ向、「本の藁屋ニ帰りけり」ト離ス。

(3) 《卒都婆小町》

一 出立。段子角帽子。熨斗目。水衣着流。墨絵ノ扇指。珠数持。連僧耆人。次第、常ノ通り。正面向テ名乗。答拜シ「夫前仏ハ」ト謡ヒ乍ラ左へ披キ、立(廻リ)連ニ向、「夢の」ト連謡ヒ乍ラ立向。道行、常ノ通半着。セリフ言テ座へ行、下ニ居ル。太夫出テ不見。床机ニ腰掛ルト居ナガラ向。「なふく是成」ト謡。連モ太夫ヲ見ル。「教化して」ト連ニ向。連勿論答テ立。太夫ノ跡ヲ通り、脇正面へ行、脇ト立向。太夫へ向【立】。(脇モ太夫へ向立。)一足出テ問答。此内(心持)口傳有。「本より愚痴」ノ打切ニ、連、太夫ノ後ヲ通り、本ノ座へ戻リ、太夫へ向、立テ居。「僧は頭を」ト云フ時(後へ三足程)シサリテ跪、軽ク礼ヲス。連モ一緒ニ下ニ居。(礼ハ脇ハカリ也。)太夫「我ハ其時」ト云フ時、手ヲ上、トクト下ニ居。「近頃心ある」ト脇正面向謡テ太夫へ向。「いかに」ト云。地へ取ト離ス。論義ニ向。口傳有。「又狂乱」ト太夫ヲ思ヒ入テ見ル。物着ヨリ不見。切ニ「あら苦しめまいや」ト云フ時向キ、返シニ離ス。

(4) 《石橋》

一 出立。大模様角帽子沙門。大格子。水衣。大口。珠数紫房。金扇。掛絡。立所、大小ノ前通り、少シ右へ寄りテ、名乗。「只今思ひ立て候」ト答拜シ、一足引テ、「爰ハ早」ト云フ。「向ひは」ト少シ左へ披キ向フヲ見ル。諷スギテ、座へ行、下ニ居。太夫出テ、小謡中ノ打切ニ向キ、返シニ立、一足出テ問答。「身命を仏意」ト正面角掛一足出ル。太夫「暫」ト云ト向。「ウハの空成」ノ打切ニ下ニ居。轉前ニ廻賦云テ離ス。さしニ向キ、中入迄見テ居。後、獅子不見。「獅子とら殿」と向。切ノ返ニ身ヲ直ス。

(5) 《鉢木》

一 出立、角帽子。熨斗目。水衣着流。墨絵扇指。珠数。笠ヲ着。次第二段ニ出ル。立所大鼓右ノ手通り。地返シニ立マワリ乍ラ、笠脱右ニ持テ、正面向、名乗。笠ニテ答拜。打切ニ笠着ル。道行常ノ通り本着。立マワル内ニ笠脱、セリフ、云テ、左へクツロキ。仕手柱ノ本へ行。ツレノ方へ向、案内乞。ツレ立ト向、問答。「夫ハ免も角もにて候。」ト云フテ、立マワリ、太鼓座へ行。下ニ償居。太夫出、「扱其修行者は」ト云フ時、笠ヲ右ニサゲテ、立、正面向テ、仕手柱ヨリ耆尺先へ出。太夫へ向キ、「我等が」ト諷。「あら曲もなや。」ト少シ気色有リ。「よしなき人を待ち申て候」ト諷乍ラ右ノ足ヲ先へ出シ踏廻リ、右へ披キ、又太

鼓座へ行き償。ツレ「然るべくは」ト云フ時、笠ヲ着テ立。太夫「いや〜」ト云時橋掛松ノ先迄行ト、太夫「なふ〜御宿参らせう」ト云時、足ヲ留、遠聞心口傳肝要。但シ左へ少シ披キ立テ居。「見苦う」ト云時、太夫来リ左ノ袖ニ取付ト笠脱、右ニサゲ、太夫へ面会ス。「実しも」ノ打切ニ座へ行、下ニ居。右ノ方ニ笠ヲウツムケ、紐ヲ少シ出テ置。太夫へ向テ居。問答ノ中、心持。ツレ・太夫問答ノ中離居。「いかに申候。」ト太夫へ向。曲舞不見。「切くべて」ト太夫来ルト向。居乍ラ問答。「なふ夫ハ」ト少シ驚ク心持肝要。太夫働、心ヲ付見ル。「よしや身の」ト居ナガラ謡。「扱て何国にか」ト角掛テ見ル。「今日斗リ」ト云フ時向「名残ハ宿に」ト笠取右ニサゲ、「暇申て」ト立。「さらばよ常世」ト謡ヒ乍ラ、太夫ノ前ヲ通り仕手柱ヨリ三尺先へ行。「自然鎌倉に」ト立マワリ、太夫へ向。「きやうかる」ト正面へ向、「公方の縁に」ト太夫へ向。「御沙汰」ト左ノ手ニテ太夫へ指。「云捨て」ト右へ立廻リ「共に名残や」ト左ニテシヨリ、返ニ手ヲオロシ中入ス。後出立、金角帽子。小格子。大口。紫衣。掛絡。腰帯〔少シ金入〕。小刀。金扇。御教書ヲ懐中ス。二階堂、直打。白鉢巻。厚板。側次。大口。小刀。太刀ヲ持。脇ノ跡ニ付出ル。一声不越。又応答ニテモ出ル。座へ行、床机ニ掛ル。連、地謡二番目ノ前ニ居。太刀ヲ後ニ置。扇持居。太夫出、不見。

右へ披、連ヲ呼時、連両手下ケ、答テ立、仕手柱ノ本へ行。狂言呼出、シカ〜有テ、左へ立戻リ本ノ座ニ下ニ居。「参りて御前に」ト太夫、舞台へ入、下ニ居ルト向。「やあ是成」ト諷。「又当山の」ト正面角掛ル。「先々沙汰の」ト太夫へ向。「又何依り以て」ト脇正面へ披キ、「何時の世にかハ」ト向。「其返報に」ト脇正面へ披、「合せて」ト向。「相違あらざる」ト懐中ヨリ御教書ヲ右ニテ取出シ左ニ持テ「安堵に取添」ト前へナゲテ渡ス。「扱て国々」ト離ス。連、太刀持テ入ル。色々口傳。

(6) 《谷行》

〔図〕一、出立。銀蘭角帽子沙門。小格子。水衣。白鈴掛。着流。無色金扇。前後共イラタカ持。始メニ太夫、脇座へ出居。笛ノ上ニ子方居。立所大鼓右ノ手通。答拝シ、左へクツロキ、立廻リ、仕手柱ノ本へ行、子方ノ方へ向、案内乞。子方立ツト向、問答。子方、太夫ト問答中、正面向居。子方「此方へ」ト云時向。「御痛はりの由」ト太夫へ向。謡乍ラ大小ノ前へ出、下ニ居。問答。「頓て参らうずるに候」ト云テ立。右へ立廻リ、仕手柱ノ本へ行ト、子方後ヨリ呼掛ルト立向。「重て母御に申候べし」ト云テ、又始メノ所へ出。太夫ヲ見テ、下ニ居乍ラ「又参りて候」ト云フ。太夫子方へ向クト正面へ披キ、二人ノ問答聞テ居。「かきくどきつる其気色」ト太夫へ向。「孝行の深きや」ト

右ノ手ニテシオル。「袖も切るべきに」ト立。子方ノ前へ行。引立テ「別れは」ト太夫ノ方ヘ向カセ、左ノ手ヲ肩ニ掛、橋掛一ノ松ノ本迄行、「葛城や」ト足ヲ留。左ノ手ヲ放シ、正面ヘ向。「高間の山の」ト上ノ方ヲ見上、「晴れぬは親」ト子方ヲ見。「名残惜しさを」ト左ノ手ヲ掛、右へ披キ、誘テ一足出、子方ノ先ニ立、中入ス。

後、出立、山臥頭巾。金入鈴掛。中格子。水衣。大口。小刀。金扇。腰帯〔金入〕。数珠イラタカ。子方、山臥。珠数不持。小刀指ス。連八人山伏。中入ニ脇正面ヘ台出ル。後見ニ頼み、正面ヨリ四尺手前に置クベシ。子方先ニ立出ル。子方ハ脇座ノ方、脇ハ脇正面ノ方ヘ出。正面立、子方モ同。連ハ立向ト直ニ下ニ償居。「苔の衣と」子方ヘ向。「今日思ひ立」ト謡ヒナガラ立衆〔立〕向、「ふりさけ見れば」ノ打切ニ正面向、「留布（マヌ）の神杉」ト出、「三輪の山本」ト角掛、閑ニ出ル。道行文句長シ。心持有ベシ。「葛城の」ト延テ、「露こそ」ト立戻、半着。立廻リ、正面向、セリフ云。「今夜ハ此所ニ」ト小先達ヘ向。（一ノ連ヲ小先達ト云フ。）小先達答有テ、子方ヨリ段々座ヘ行。子方ノ次ニ脇。其次ニ小先達。皆々下ニ居ルト、子方、「いかに」と云時向。「先暫御休み候へ」ト云テ、子方、後ヲ向セ、頭巾・鈴掛・小刀・扇ヲ取テ、脇ノ持タル珠数、懐中シ、平座シテ、子方ヲ引寄正面ノ方ヘ頭ヲ直シ、大小ノ方ヘ足ヲ

ナシ、脇正面ノ方ヘ顔ヲ向ケ、左ノ衣ノ袖ヲ、子方ノ顔ニヲ、ヒ両手ニテ、イダキカ、ヘテ居。小先達、子方ノ能クネルト立、真中ヘ出、脇ヘ向、下ニ居テ「いかに申候」ト云ト脇顔斗向、答。小先達「扱テハ目出度候」ト云テ立。右ヘ立廻リ、仕手柱ノ本ヘ行。又左ヘ踏廻リ、連ノ方ヘ向、一足出「いかに渡候か」ト云時二ノ連立向、一足出、「何事にて」ト云。「さあらば其由先達ヘ申候べし。」ト云テ直クニ真中ヘ出、脇ニ向、下ニ居、問答。二の連ハ直ニ下ニ居。脇「各仰られ候モ」ト顔斗小先達ヘ向。「念比に申聞せう」。ト云テ、子方ノ顔ヲ能々見、「いかに松若」ト諷。「心持口傳。」小先達、正面向テ居。子方諷ト脇思入テ聞。「皆御名残こそ」ト云時、小先達始メ立衆何レモ子方ノ方ヘ向。「声をのみ、涙に」ト皆々右ノ手ニテシヨル。「頓て面々、一面（トウ）に」ト謡乍ラ、小先達、正面ヘ向。皆々角掛テ謡ヒ、ワキ、「先達」ト只ヲ上テ謡時、皆々ワキヘ向。「泪（ナミ）なみだ」ト子方ノ只ヲ見。「せかれぬ」ト云。心持口傳。「身も諸共に」ト右ノ手ニテナク。「かなしみの」ト手ヲオロス。顔ヲ上ル。「中々死別ならば」ト子方ノ只ヲ見。「か程の歎き」ト頭ヲ打垂テ思ヒ入テ見ル。「一切有為の」ト顔ヲ上ル。曲舞ニ小先達、正面ヘ向、「親子恩愛の」ト子方ヲ見。「歎きに」ト右ニテシヨル。曲舞ノ内、口傳有。小先達、「角くて時刻も」ト謡乍ラ、ワキヘ向。扇サシ、

珠数懐中ス。立衆「皆同トテ」ト、小先達、立テ脇ノ前へ行、償テ子方ヲイダキ、急ニ立、後ヘフリ向。脇「やるまじ」ト少シ延上リ両手ヲ差出スト、二ノ連スラノト来テ脇ノ肩ヲ両手ニテ無氣胸ニツク時ドウト居ル。三ノ連ハ笛ノ上ヘ行。白絹ヲ取、台ノ側ヘ行。小先達ハ、台ヘ上リ、「谷に落入」ト云時、償テ台ノ向ヘ子落置。頭ヲ脇ノ方ニシ、只ヲ台ノ方ニナス。其時白絹ヲかける。小先達立、谷底ヲ深く見ル。立衆皆々台ノ跡ニ立并、谷ヲ見込、「声ヲ上」ト皆一同ニ下ニ居テ「皆々面々に」ト一同ニ両手ニテ泪、脇ハツカレテドウト居。「けはしき谷に」ト延上リ見テ平座シ、両手ニテ涙。直ニ扇ヲ左ニ持。左ノ膝少シ正面ヘ出シ、単身に成リ、扇ヲ小指ニ当、頭ヲモタス心持ニテ眠。連皆々眠。シカシ連眠テハ悪シキ物。小先達仕手柱ノ本ヘ行。角掛少シ上ヲ見テ、「や、早夜が明けて候。」ト云。立衆ハ泪テ手ヲオロス。皆々本ノ座ヘ行、下ニ居。小先達「夜も明けて候」ト云テ真中ヘ出、脇ヘ向。「いかに申候」ト云時、脇オキテ、右ヘ扇ヲ持、平座シテ、小先達ヘ向、問答。小先達、「御歎き尤にて候」ト云テ立。仕手柱ノ本ヘ行、連ノ方ヘ向、「いかに」ト云フ。其時二ノ連立向一足出テ「何事」ト云。此内脇ハ離シテ居。問答スギテ小先達又真中ヘ出、下ニ居テ、脇ト問答。脇モ向。「左様の事杜」ト膝ヲ立、扇ヲ指、珠数ヲ持、悦ヒヲナス心持專一也。

「皆々力を添て」ト大勢ニ見マワシ向。小先達答テ立。脇ノ次ヘ行。皆々一同ニ脇正面向テ立并、「扱も師匠の」ト諷出ス。「受納タレ給ひ」ト皆々珠数ヲ左ヘカケ、「使者の」ト一同ニ閑ニ祈出ス。脇ハ「たれ給ひ」ト珠数カケナガラ正面角掛テ祈ル。「おわしませ」ト皆々詰メテ祈切、手ヲオロル。本ノ座ト下ニ居。後。行者出、「いかに面々」ト云時、居乍ラ皆々向。脇居乍ラ問答。「本より衆生」ノ打切ニ皆々身ヲ直ス。早笛ニ脇離ス。太夫出ト向。「心をかんずる」ト立テ行者ノ前ヘ行、償テ子方ヲ両手ニテ受取、立誘テ本ノ座ヘ戻リ、子方ノ次ニ下ニ居。切迄見テ居。子方ヲ先ニ立入。此脇謡專一。謡アラクテハ移ラヌ物也。工夫肝要。口傳色々。

(7) 《雷電》

一 出立。段子角帽子。小格子。水衣。着流。腰帶。金扇。珠数紫房。立所真中。連(ソウ)二人。仕手柱ノ本ニ償居。答拜シ、座ヘ行、床机ニ掛。連次ニ居テ謡。太夫出、不見。「深更に軒白し」ト正面角掛。「あら不思議の事やな。」ト脇正面向。「餘りの事の」ト太夫ヘ向。問答。「はや此方へと」ト立。前ヘ三足出。「影めづらしや」ノ打切ニ立廻リ、座ヘ戻リ、下ニ向テ居。「秋におくる、」ト脇正面向テ謡。「切なるは」ト太夫ヘ向。曲舞見テ居。後、「折節本尊の」ト謡乍ラ正面角掛見ル。扇指、「戸びらくわつと」

ト中腰ニ成リ、「僧正御覽じて」ト向ヲ見ナガラ閑ニ立、「しや水の印を」ト左ノ手ヲアフムケ、右ノ手ヲウツフセテ、少シニギリ、右ヘ珠数ヲ持、「火焰は消ル」ト太夫ニ向。返ニ離シ、太夫仕手柱ヲ越ルト入。中入ニ脇座ト脇正面ヘ台ニツ出ル。後、出立、金入角帽子沙門。掛絡。中格子。紫衣。大口。金扇指。珠数イラタカ持テ出ル。脇座ノ台、跡ノ方、左ノ足ヨリ上ル。口傳。台ノ真中、中腰ニ成リ、「扱も」ト諷。「紫宸殿に座し」ト右ノ手ヲ胸尺迄見テ珠数ヲ左ヘ掛、「珠数さらくと」ト祈。「押もんで」ト祈切テ手ヲオロシ、「普門品の」ト謡ヒ、「俄に晴レテ」ト上ヲ見、「されば杜」ト目通りヘ向。「油断しける所に」ト膝ヲ立替、单身ニ成リ、幕ノ方ヲ見ル。此内珠数ヲ輪ニカケ持。「雷の姿は」ト太夫ヲ見ル。問答。「ならざりける杜」ト正面向キテ立祈ル。「弘徽殿に移りたまへ」ト右ヘ披、台ヨリトビ下リ、表ヲ通り、脇正面ノ台ヘトビ上リ、正面向、祈。太夫ハ裏ヲ通、ワキ座ノ台ヘ上ル。「梨つば梅つば」ト左ヘ披、台ヨリトビ下リ、「ひるの間、夜のおとぎ」ト真中ニテ太夫ニ付、右ヘクルリトマワリ、「行違」ト脇座ノ台、正面ノ方ノ角迄行、「廻り合テ」ト顔斗後ヘフリ向、太夫ヲ見。「我おとらじと」ト太夫ノ前ヘユラくとト行。願念ノ心持ニテ祈。「もみ合くと」ト太夫ニ追レナガラ。脇座ノ台ノ角迄引サガリ、追掛くとト太夫ヲ急度ト

見ルナリ。強ク祈ナガラ太夫ヲ追テ、太鼓ノ前迄行。「恐しかりける」ト中腰ニ成リ合掌シ、「千手陀羅尼」ト手ヲオロシ、立廻リ、台ノ下ノ角ニ腰カケ、太夫ヘ向テ居。「御門は天満」ト立。前ヘ三足出、正面向テ償。太夫ト一所ニ両手ヲツキ「菅相丞に」ト礼ヲシ直ニ立。台ノ次ヘ行、下ニ居。「是迄なりや」ト云時、太夫ヘ向キ、返ニ離シ、扇右ニ持テ入。(金剛ニテハ切ノ仕方違。)

(8) 《調伏曾我》

〔凶〕一、出立、大模様角帽子。小格子着流。水衣腰帶。小刀。無色金扇。珠数紫扇。子方、箔。袴下茶筴髪。小刀。子方ヲ先ニ立。(太夫出テ後)出。橋掛中程ニテ(正面)請テ「此程の」ト諷。子方ハ要ノ松ノ本ニ正面向立テ居。「いかに申べき」ト脇ヘ向。ワキモ子方ヘ向キ答ル。「先一番に」ト子方脇座ヲ見テ諷。「鎌倉殿にて御入候か」トワキヘ向時、ワキモ子方ニ向。「難望いみぢき」ト頼朝ヲ見ル。子方段々謡ニ合セ次第ニ見渡ス。「あれをば誰とか申候」ト、脇ヘ向ク時、向、「あれ杜」ト謡。子方、太夫ヘ向「祐経」ト云ヒ乍ラ前ヘ出ル時、スラくとト出、子方の後ヨリ右ノ肩ヲトラヘ、「暫」ト云。子方、ワキヘ向。「先此方ヘ御入り候へ」ト云テ子方ヲ先ニ立。舞台ヘ入り、子方ハ仕手柱ヨリ四尺先ヘ出。太夫ニ向、問答。ワキハ太鼓座ニクツロギ償居。「門前さして追て行く」ト子方太刀ニ

手ヲ掛ケ、单身ニ成リ、幕ノ方ヲ見テ仕手柱ノ本へ来ルト、ワキ立、スラノト出。子方ヲ両手ニテ留、「言語道断」ト諷。手ヲ放シ、「かゝる」ト云。「手取足取」ト子方ノ左右へ両手掛、右へ披、橋掛ノ方へツレ行、返シニ手ヲ放シ、子方ヲ先ニ立行、一間ホド行テ左へ披ナガラ狂言ヲ呼、「ごまの檀をかざり候へ」ト云テ入。中入ニ台出ス時、後見ニ頼ミ真中ヨリ三尺脇座ノ方へヨセ置様ニスベシ。〔図〕脇座在リテハ殊ノ外居所難儀。台ノ上ノ方、床机ニ黒頭ヲ置キ出ス。金剛ニハ作物ニ太夫人、大小前へ出ス。後出立、金角帽子、沙門前後。小格子。水衣紫衣ニモ。大口。イラタカ。金扇指。小刀。連、常ハ四人。熨斗目。角帽子。水衣。大口。右ニ珠数。扇指。ワキノ跡ニ付キ出ル。ワキ出テ、台ノ下ノ方ヨリ、左ノ足ヨリ上リトクト居テ、「抑も」ト謡出ス。連ハ台ノ下ニ…如斯下ニ居。「面々に」ト皆々左へ珠珠掛テ祈出ス。口傳有。尤中腰ニ成リ、左ノ膝ヲ跡へ引テ祈。「頭を傾け」ト皆々頭ヲ下ゲ、手ヲ上、願念シテ祈ル。次第ニ祈ヲツメ、「高クアゲ」ト皆々祈切。手ヲオロシ并居。〔図〕脇ハ正面角掛テ「東方」と祈切テ手ヲオロシ、台ヨリ下ニ居。「五壇の上に」ト太夫ヲ見ル。「あら有難の」ト脇斗リ拝ム事モアリ。「山河草木」ト脇正面へ披ク。「身の毛もよだつて面々に」ト云時、皆々大夫ヲ見ル。切ノ返シニ離ス。

(9) 《道成寺》

一 《道成寺》《関寺小町》《三井寺》、右三番、小刀指申候。一出立、金角帽子。小格子。紫衣。大口。腰帶〔少シ金入ヲ用。〕金扇。イラタカ。連二人、のしめ。角帽子。水衣。大口。扇。イラタカ。立所。舞台真中。連、仕手柱ノ本ニ償居。答拜シ、左へクツロギ、狂言呼出ス。狂言、仕手柱ノ内へ入。「御前に」ト云時向、セリフ云テ、座へ行、下ニ居ル。狂言鐘ヲ釣テ後來ルト向。セリフ有リ。狂言觸ル内離ス、来ルト向。「近頃にて有」。ト云テ脇正面向テ居。大夫出テ、不見。乱拍子ノ内、正面向掛居。口傳。大夫、鐘入後、狂言来ト向、セリフ有。但シセリフノ内心持口傳。狂言立テ行ト、一ノ連ニ向ヒ、「かう渡り候へ」ト云テ立。鐘ノ方へ三足出、能ク見テ「是は抜群に」ト謡。但シ出様口傳。連二人共、立鐘ヲ見。一足出テ問答。「さあらバ御物語り候へ」ト云テ正面向掛、一足出テ語。始ノ連、角掛、一足出。跡ノ連、鐘ノ前へ行、正面向。始ノ連ヨリ身尺下リテ居。語ノ中、序破急。突息、還息、氣ノ替へ心持難所歟。口傳。「年月日を送る」ト始ノ連へムク。幽ニ向。又角掛テ「亦有時」ト謡。「追かけしに」トツメテ一足出ル。「山伏此まに」ト氣ヲモトシテ一足跡へ引。「其中に」ノ「な」ノ字ニ当テ、跡ノ連ニ向、「去程に彼女は」ト諷ナガラ、一足出、「あの」ト幕ノ方ヲ遠ク見ル。「かみ」ト仕手

柱ヨリ三尺先ヲ見。「下へ」ト左へ少シ披、目ヨリ先へ向
ヲ見ル。「此寺に來り」ト無氣胴ニ始ノ連へ向。「爰」ト氣
ユルメテ鐘ノ前通り、五尺先ノ方ヲ下ヲ見。「かしこ」ト
角掛ニ目遣「龍頭」ト云時右ノ足、心持口傳。「なんぼう」
ト扇ニテ手ヲ一ツ打時見テ打テ「恐しき」ト手ヲオロシ、
始ノ連へ向。ツレ向テセリフ有。「皆々力を添て」ト跡ノ
連へ向ナガラ扇ヲ指、右ニ珠数持。連答テ本ノ座ヨリ少シ
下リテ脇正面向。扇指、珠数右ニ持。脇餘リ出スギタル時
ハ、座へ戻リ、正面角掛テ「水返て」ト諷。「皆一同に」
ト鐘へ向ナガラ左へ珠数掛、手ヲ合セ「東方に」ト諷。
「不動」ト大鼓頭ヲ一ツ打。太鼓「イヤ」「動くか」ト謡。
「イヤ」ト此時左ノ足ヲ引、両手ヲ上、「動くか」ト祈出ス。
但シ祈ノ中序破急。「今の蛇身」ノ当リヨリ、ズイ分精ヲ
入、急ニ祈。「何の恨みか」ヨリ脇ハ不諷。「有明の」ト三
人共祈切、撞鐘頭「有明の撞鐘杜」ト程無。太鼓ト能々申
合。口傳。「撞鐘こそ」ト鐘ヲ見テ謡。「すはく動くぞ」ト
祈。猶々精ヲ入、「不動の四句のけ」ト鐘ノ方へ二足出ル。
「黒煙を立て」ト三人共ニ両手ヲ上、頭ヲ下ケテ、願念ノ
心ニテ上ノ方ヨリ下へ祈下ル。「つかねど此鐘ひゝき出」
ト爰ニテ太夫鐘ノ内ニテ止羅ヲ打時、音ニヲジル心ニテ三
人共跡へ引下リ、返ノ「つかねど此鐘」ト前へ二三足出、
祈ル。「程無く鐘楼へ引上たり」。ト座迄引サカリ中腰ニ償。

「あれ見よ」ト手ハ其儘合テ居ナガラ顔斗始ノ連ニ向。連
勿論。其儘立、太夫ノ前へ出、祈ル。連ハ脇ノ後、左右ニ
立并、祈働ノ中、太夫ニ付テ祈ルベシ。太夫仕手柱ノ本ニ
テ、ノリフリ返リニツ拂時、跡へ少引下リ、仕手鉄杖ヲオ
ロストスラく出、祈ル。太夫橋掛中程迄行時、跡ニ付ケ
テ行、随分精ヲ入祈ル。連ハ仕手柱ノ本左右ニ立并祈ル。
太夫跡へ見返リ鉄杖フリ上ルト跡へ引下リ舞台へ入ルト左
へ身ヲ取りテ、跪。太夫柱卷、仕手柱ノ本へニヅリヨリ、
頭ヲサゲ責祈。連モ左右ニ償責ル。太夫跡へタラくト下
ル時、立。押ツメ行、急ニ祈ル。太夫鉄杖ヲ上、スラく
(ト)出時、又跡へ急ニ下リ祈ル。太夫舞台へ入、仕手柱
ノ本ニテ鐘ヲ見ル。鐘ヲ隠ス。心持有口傳。三人共精ヲ入
祈ベシ。太夫、仕手柱ノ先へ出、ノリ、鉄杖振上追時、ス
ラくトサカル。太夫立返リ鐘ニ取付所ヲスラくト行、
引落シ珠数ニテ一ツ打。此内不祈。ツレモ不祈。小鼓「タ
ツホ」と頭ニ付テ、二足跡へ引。「謹請東方」(ニワキハカ
リ祈出ス。)ト三人共祈出ス。太夫動キニシ【カ】(タ)ガ
イ、小足遣祈ル。「祈り祈られかつば」ト祈切。立廻座へ
戻。扇ヲ右ニ持、太夫ヲ見テ立テ居。連モ地ノ前へ戻リ、
扇ヲ持居。「日高の川波」ト太夫橋掛へ行キ、幕ノ方へ行
ヲ跡ヨリ付テ仕手柱ノ本迄スラく行。「飛でそ入にける」
ト踏止マリ、幕ノ方ヲ急度見。「望たりぬ」ト左へ披、正

面へ三足出。左ノ足ヲ引取ナカラ扇へ左ノ手ヲ掛。又右ノ足ヲ引ナガラ扇ヲ披キ、幽玄シ、右へ披、左ノ足ニテ拍子一ツ踏。扇ヲタ、ミ入。連跡ニ付テ入。上流ハ始ニ鐘ヲ釣。後ニ脇出ル。其時大鼓右ノ手並ニテ名乗。セリフ違ナリ。

一、幕ノ中深く掛、深足。幕離レ心持。口傳。

一、カケリノ中、鐘ノ下通ヌ様ニ心ヲ付ベキ事。

一、高ク祈事。口傳。

一、二重留ト云事。口傳。

一、カケリノ中、太夫追前ニ、精ヲ入祈。其外の連ニ精出サスベシ。

一、撞鐘頭。口傳。


一、撞鐘頭。上流太鼓ノ頭「ツ天天」ト謡也。

(10) 《檀風》

一、出立、山伏頭巾。鈴掛。無色厚板。水衣。腰帶。大口。(木ノ)小刀。イラタカ。

山伏ニセズ。《谷行》前ノ衣装ニ同。始ニ本間。出立。

直打。白鉢卷。厚板。直垂上下大口込。金扇。小刀。太夫ヲ先ニ立出。太鼓座ニクツロギ居ル。輿掛二人。厚板。大口。茶筌髪。右ノ後ニ扇指出。仕手柱ノ本。少シ左ニヨリ償居。狂言太刀ヲ持テ、輿ノ次ニ居。太夫座へ行。床机ニ掛ルト立。右へ披、大鼓右ノ手通りニテ名乗、答拜シ、左へ披、立廻リナガラ、狂言呼セリフ云テ、地唄ニ番目ノ前

へ行下ニ居ト輿掛、太鼓座ノ後へ入テ居。脇、子方ヲ先ニ立、次第二段ニ出。子方一ノ松ノ本ニ立。脇ハ一間下リテ正面向遠延。子方ニ向。次第諷。但シ橋掛真中ニ立テハ、道行仕難故、裏ノ方へ寄、立向ベシ。地返シニ立廻リ、正面向、名乗、子方モ正面へ向。「又是に」ト子方へ向。「父御今度」ト正面向、答拜シテ(直ニ)子方へ向。道行謡。子方モ同。中ノ打切ニ右へ披、道行ス。「行ば沖にも」ト足ヲ踏延テ、「佐渡の」ト左へ披、裏ノ方ヲ向。立廻リ、正面向、セリフ云。「先かう渡り候へ」ト子方へ向。子方キノ右ノ方ヲ通りワキの跡へ行、正面向、立テ居。脇、一ノ松ノ本ニテ狂言ヲ呼出シ、セリフ有。狂言「夫に御待候へ」ト云時答テ、左へ披キ、裏ノ方へ向。子方ト一緒に償居。尤正面へ後ヲムケヌ様ニ心ヲ付ヘシ。狂言、本間トセリフ有テ、「最後の客僧の渡り候か。」ト云時、右へ披、立一足出。狂言ニ向。「是ニ候。」ト云。子方モ立。前の所ニ出居。狂言「かうく御通候へ。」ト云時、答テ舞台へ入ト、本間立、右へ向ナガラ「都よりの客僧」ト謡掛ル。脇、大小前ニ立テ、本間へ向、「是ニ候」ト云時、本間立向、一足出、問答。子方、ワキの跡ニ付、舞台へ入。太鼓の前通、仕手柱ヨリ五尺先へ出、本間へ向、立テ居。ワキ「是に渡候幼人は」ト子方ヲ見ル時、本間モ見ル。「父御ニ今一度」ト本間へ向。本間モワキへ向。「殊に幼人の」

ト子方ヲ見ル。「其由申さうずる」トワキヘ向。脇答テ、直ニ下ニ居。子方モワキノ次ヘ行、并テ下ニ居。本間身ヲ直シ、下ニ居ト太夫「籠鳥雲を」ト謡出ス。「住はつまじき」ト本間立テ、独脇ノ時、道行ノ所マデ閑ニ行、謡テ能聞、角掛テ「あら痛しや」ト云。「申さばやと存候」ト云、左ヘ披キ、二足出、太夫ヘ向。「いかに申候」ト云。「只今参る事」ト謡ナガラ真中ヘ出、下ニ居。「頓而追返」ト謡乍ラ立テ、右ヘ踏廻ルト、太夫「なふく都の」ト云ト又左ヘ廻リ向。「さあらば御覧候へ」ト謡乍ラ、太夫ノ右ノ方ヘ行。扇ヲ両手ニテ披。太夫立ト目通りヘ扇ヲ上、二人ノ方ヲ見テ、「あれなる者にて候。」ト云。扇ヲ下ケナガラ、太夫ノ泪クヲ見、「あら不思儀や」ト謡乍ラ扇ヲタ、ム。一足引テ、立テ居。「心得申候。」ト云テ右ヘ披、少シ出、始ノ居(夕)座ヘ行。立廻リ、ワキノ方ヘ向。「㊦」「最前ノ客僧の」ト云時、脇立向、「是に候。」ト云。子方モ立、始ノ所ヘ出。本間ニ向、問答ノ中心持口傳。「なふ御案有ても」ト諷。心持口傳。「天晴。」ト正面ヘ向。「やはか左様には」ト右ノ足ヲ先ヘヒネリテ本間ヘ向。本間「此後ハ某」ト左ノ足ヲ先ヘ出シ、「存」ト謡ナガラ大廻リシテ無氣胸ニ下ニ居。謡ニ掛テ、「如何に暫く」ト足ヲツメ一足出ル。心持口傳。「㊦」息ヲ還シテ右ヘ披、子方ニ向。「なういかに」ト云。子方、ワキヘ向謡。太夫謡出スト二人共

正面ヘ向、「立添乍らモ」子方ト向合、右ノ手ニテ二人共シヲル。「今日御最期」ノ打切ニ子方ノ跡ヘ出、二人共正面向、立テ居。輿、仕手柱本ヘ出、償。大夫立ト輿掛ル。大夫ノ動キニ付テ出ル。本間立テ、輿ノ跡右ノ方ヘ寄り、正面向、立テ居。大夫動キニ付テ出ル。狂言本間ノ次ニ太刀持テ付。子方、「起つまるび」ト左ヘ披、「泣々」ト右ノ手ニテ泪ナガラ狂言ノ次ヘ行。正面向、立、ワキモ跡ニ付テ立。「あはれさや増るらん」ト大夫正面先ヲ通り右ヘマワル。皆々跡ニ付マワリ、大夫真中ニ正面向下ニ居。本間、笛ノ上ニ行。後向償。脇、小鼓ノ前ニ正面向下ニ居。子方次ニ居。輿ハ仕手柱ノ本ニテ持替ヘ、太鼓座ヨリ入。本間左ニ太刀持。扇ヲサシ、「武士頓而」ト立。右ヘ披キ、ワキ座ヨリ、少シ手前ヘ出、大夫ヘ向、償。「御十念」ト右ノ手ニテサシ、返シニ手ヲオロス。但シ返ニ子方立テ、大夫ノ右ノ方ヘ行償。右ノ袂ニ左ノ手ヲカケ「あらこいしや」ト謡。大夫、脇ヲ呼ト其儘右ヘ披立。大夫ノ右の方、少シ下リテ出、償。両手ヲサゲ、「御前に候」ト云。「畏つて」ト云。「畏つて」ト云テ、子方ノ側ヘ行、償。子方ヲ両手ニ誘ヒ、立テ小鼓ノ前に子方ヲ下ニ置。次ニワキ、下ニ居。本間太夫ト問答。「弓矢八幡も」ト角掛、「頓て都へ」ト太夫ヘ向。「西に向ひて」ト立、笛ノ上ヘ行、後向テ償。大小ツヅケ打テ居内袒カクヌク揚(尤右也)。(太刀笛ノ上ニ出シ置。)

左ニ太刀持、返シニ立、右へ披、太夫ノ後、少シ左へ寄りテ立。「南無阿弥」ト太夫ノ頭ヲ能見、「唱へ給へバ」ト太刀拔（見）。「あへなく」ノ「く」ニ掛、右ノ身ヲ入レテ切。（但シ太夫前ニ出、カクス心持。）左へ披ナガラ太刀ヲオサメ、笛ノ上へ行、下ニ居。此内ニ太夫入。太刀ヲ置テ、右へ披、ワキへ向。脇モ向。問答。但シ、太夫、掛絡置テ入。舞台ヨリ四尺程手前。座ノ方ヲ上ニシ、熨斗目・掛絡ヲ置。後見脇ヨリ出スベシ。置様口傳。（ウツムケニヲク習）。問答スギテ、ワキ、小鼓ノ方へ向。扇指、珠数ヲ輪ニシ、懷中シテ右へ披、正面向テ立テ閑ニ死骸ノ側へ行、償。能見テ、死骸取様口傳。此内本間、地唄ノ方へ向、肩ヲ入、扇持〔此間口傳。〕ワキ、太鼓ノ前へ行、右ノ膝頭（ドン）ト音シテ償ト、本間直ニ立、右へ披、真中へ出、正面向。「いかに某が」ト云。「心安く夜を明さう。」ノ「夜」ニカケテ右へ披入。ワキ死骸ヲ後見へ渡シ、扇ヲ持。本間入ルト立、右へ披キ、子方ノ右ノ方へ行。「此上は」ト謡乍ラ償。両手ニテ誘テ立、手ヲ放シ、大鼓ノ前ニ立。子方、地頭ノ前ニ行。「いかに」ト云。ワキ向、問答。「其上此島」ト正面向、「何と」ト子方へ向。「日本一の」ト前へ一足出時口傳。「御本望」ト扇ヲ指。「此方へ渡り候へ」ト謡乍ラ、子方ノ添へ行、両手カケ、右へ披、誘。橋掛一ノ松ノ先迄、スラ／＼ト行。子方ヲ持替へテ左へ引廻、右ノ手ヲ肩ニ掛、

又スラ／＼ト舞台へ入。子方ヲ留、座ノ方ヲ見テ、「あら笑止や」ト謡。「未だ寝屋の」ト子方ヲ見。「何の為にか」ト手ヲ放シ、座ノ方ヲ見ル。子方立テ居。「今杜消べき」ト誘乍ラ二足出償。「障子を細目に」ト両手ヲ出シ、右へ障子ヲ明ル心持。「虫は悦」ト立。「すハ火はばつと」ト手ヲ打タル「ハ」ニ掛テ出ル。「灯共に」ト、子方スラ／＼ト出。ワキノ右ノ肩先へ左ノ身ヲ当ルト、ワキ右ノ手ニテ押留、子方ヲ見。「敵の命」ト座ヲ白眼ニテ見。「打へけれ」ト子方ヲ見ル。「ひそかに」ト子方ヲ両手ニ誘テ、返ニ二足出。手ヲ放シ、「守り刀を」ト云時、右ヲ踏出シ、木サ刀ヲ拔。子方ハ扇ヲ左ノ手へ持替へ、右ノ手ニテ拔様ニシテ、右へ披ナガラ、扇ヲ見、「抜持て」ト手ヲサゲナガラ、只斗座ヲ見、出ントスルヲ脇両手ニテ誘、座迄ツレ行、「胸の当に」ト子方ヲ先へツキ出シ直に償。両手ニテ下ヲオサへ、子方、一ツ突キ、直ニ右ノ足ヲ引立ト橋掛リ方へ向。ワキハ子方立ト其儘右ノ膝ヲ付、左ノ膝ヲ立。子方ノ跡ヲ二ツ突キ、直ニ右へ披キ、立。子方ニ両手カケ、「縁を飛下」ト一ツ飛テ仕手柱ノ本迄行、「追手は」ト单身ニ成り、座ノ方へ顔斗見帰テ、子方ヲ放シ、先へヤリ、「留よ／＼」ト左へ向乍ラ、小刀ニ付テ橋掛へ行。子方先へ入、中入ス。後、小刀ヲオサメ、珠数ヲ右ニ持、狂言入ト其儘子方ヲ両手ニ誘、仕手柱ヨリ一尺先へ出、手ヲ放シ、

「先浦へ出て」ト云テ座へ行、子方ヲ上に立、次ニ立テ居。船指。出立。無地のしめ、素袍上下、右ノ袒褻、左ニ棹持出ル。一ノ松ヨリ少シ手前、正面受テ、「此程」ト謡。「急ぎ船を」ト左ノ足ノ爪足ヲ左へヒネリ、右ノ足ヲ踏廻シナガラ棹ニ右ノヲカケル。ワキ向テ、「されば杜」ト云。「先便船を」ト子方ニ会釈シテ船指（へ）向、一足出テ、「いかにあれ成」ト云、問答。船指、手ヲオロシ、ワキへ向。「いまだ出ぬ舟」ト始ノ通り面離ス。棹ニ手ヲカケ「殊更」ト手ヲオロシ、ワキへ向。「猶此舟ニハ」ト面ヲ離シ、又棹ニ手ヲカケル。「よし」トワキ一足出ル。「此兎独り」ト子方へ向、両手ニ誘、船指へ見スル。「いや兎も」ト謡ト手ヲ放シ向。「何の悔しく」ト手ヲオロシ、ワキへ向。「猶此舟を」ト棹ニ手ヲカケル。「舟は波間に」ト手ヲオロシ、右へ披、二ノ松ノ本へ行。正面受居。二人共ワキ正面向居。「頼みつる舟は」ト橋掛ノ方ヲ遠ク見。「追手は」ト正面角掛、「扱て御命」ト子方ヲ見ル。「急度案じ」ト子方へ向。船指ワキへ不見。「何事」ト云時ワキ向テ問答。「悔な」ト左ノ手ヲニギリ船指へ向出ス。ニギリ様口傳。「大峯の」ト直ニ左へ珠数ヲカケ、祈ル。祈中口傳。角掛テ「東方」ト謡乍ラ祈切テ、子方・脇下ニ居。太夫出ルト向。船指「何と此舟を」トワキへ向。「大嶺の」ト云ヨリ閑ニ太鼓ノ手前迄行。後ヲ通り入。切ニ「さつくの繩を舟ニ付て」ト

云時、大夫サシ、其時子方ニ両手カケ、立、大夫ノ前ヲ通り、仕手柱ノ本ニテ、手ヲ放、子方ヲ先ニ立入。

一 「沖の鷗」ト諷時二目違ノ事。口傳。

一 問答ノ内、色々口傳。若キ時ハ中入ス。年寄テハ太鼓座へクツロクベシ。

(11) 《黒塚》

一 出立、山伏頭巾。鈴掛。無色厚板。水衣。腰帶。大口。少力。金扇。イラタカ。連一人同紫。

作物ニ大夫入、始ニ大小前へ出ル。次第二段ニ出ル。但シ出様口傳。立所舞台真中ヨリ少シ上リテ立向。次第諷。

地返シニ立マワリ正面向。一足引テ「是は奈智の」ト謡。

連ハ脇ヨリ身丈下リ、正面へ向。「然るに」ト（立向ク方ヨシ。「おもむかんと」一パイニ一足出ル）直ニ連へ向合、

中ノ打切ニ道行ス。本着、立マワリセリフ云。「日の暮て」ト上ヲ見。「宿をかり」ト連へ会釈。答有テ、座へ行下ニ

居。大夫謡出ト作物へ向。「あら定めなの」ト云時、二人共立。一足出テ問答。（シテノ下ニ居ルト一緒ニ下ニ居

（二人共）「こと草も」ノ打切ニ身ヲ直シ、二人共下ニ居（初同ノ打切ニ放ス。）初同ノ中ニ（ワクカセワ）ヲ出シ、

ワキ正面ノ方ニ置。「旅寝の床ぞ」の返ニ太夫ニ向、問答。

（申物にて候ぞ）ト仕手ニ向ク。「是成物は」トワクカセワ【ヲ】（ヲ）見ル。「さらば今宵の」ト太夫へ向。太夫ワ

(ク)カセワイトナムヲ心ニカケテ見ルナリ。指、二人共太夫ヲ見テ涙。心持口傳。曲舞論議ノ内向テ居。後、居ナガラ問答。「さらば頓て御帰り候へ」ト云テ、脇正面へ向。太夫仕手柱ノ本ニテ立戻リ、「なうく」ト云時向、「左様に人の」ト立腹ノ心持ニテ謡テ直ニ身ヲ直ス。太夫入ルト狂言来ルトセリフ有り。「某もまどろむ間、汝も其れにてまどろみ候へ」ト云テ、二人共眠。但シ眠様《谷行》ノ通り。狂言立ントスル時起キテ「汝は何方へ行ぞ」ト云。「急いでまどろみ候へ」ト云テ眠。又狂言立テ廻ル所ニテ又起、「近頃」ト云。「急いでまどろみ候へ」ト云テ又眠。狂言作物ヲ見テ後起スト、少シ驚ク気色ヲ含テ起上リ、尤二人共膝立ル。「かう渡候へ」ト連ニ会釈。直ニ二人共立。(向合タマ、デ)脇ハ脇正面ノ方へ行、右ヘクルリトマワリ、左ノ爪先ヲ左ヘ少シヒネリ、右ノ足ヲ前ヘ出シ、作物ニ角掛、(下ヨリ上ニ)上ヨリ作物ノ中ノゾキ見テ、右ヲ引、平身ニ成テ「不思議や」ト諷。但シ見込。心持口傳。連ハ脇ノ後ヲ通り、太鼓ノ前通りへ行、作物へ向。立テ居。「数知らず」ト左ノ爪先ヲ少シ右ヘヒネリ、右ノ足ヲ引テ「軒と等しく」ト下ヨリ作物ノ屋根ノ上迄遙ニ見上「のつけつ」ト右テ出シ、平身ニ成リ、「ふにことごとく」(右ニテ拍子)ト作物ヨリ四尺先ノ下ヲ見。「らんゑ」ト無氣胸ニ右ヘ披、舞台ヨリ老間先ノ下ヲ見ル。二目遣、口傳。

「いか様」ト向フヲ見ル。身ヲ平ニス。「籠れる鬼の」ト顔ヨリ先へ作物ニ向。「心(此当ニテ正面向ク)もまとい」ノ打切ニ正面へ向。連モ同シ。「行へき方は」トツメテ一足出、延テ、「足に任せて」ト(右足ヒネリ左足上ゲテ左へ取り右足ヨリ出ル)左へ足ヲ取テ直ニ座へ行。正面向テ立居。口傳。連モ脇ノ跡ニ付、立テ居。太夫出、「止まれ」ト云時、直クニ向乍ラ扇先直シ、サカ手ニ持テ指。右ニ珠数持、「あたり」ト珠数ヲ左ヘカケ二人共ニサラくト出【ニ】祈ル。「カケリ」ノ中、《道成寺》ニ同ジ。但シ脇斗橋掛へ入、祈。ツレハ仕手柱ノ本ニテ立テ居。祈。柱卷スギテ太夫舞台へ入、仕手柱ノ先ニテノリ、其儘追掛ル時下リ、直ニ付テ行。太夫作物へ左ノ手ヲカケルト行掛ニ償、合掌シテ「東方に」ト謡。連ハ脇ノ右ノ方身丈下リテ償。合掌ス。「おんころく」ト二人共上ヘ手ヲ上ケ閑ニ祈リ出ス。「見我身者」ト立、太夫ノ動キニツレ先へ出、跡へ下リ、左右へ足ヲカケ祈。連ハ座へ戻リ、下ニ居。扇ヲ持。「けばくに掛けて」ト太夫追時サガリ、直ニ付ケ行、太夫仕手柱ノ本、ドウト座シウツムク。「扱て」ト珠数ニテ太夫ノエリノ所ヲ打。太夫ヲ急度見ナガラ二足サガリ、単身ニテ威勢シテ償。「今迄ハ」ノ返ニ左ヘ披、立、座へ戻リ、向テ、下ニ居。扇ヲ持、切ニ離シテ入。

一、出立、山伏頭巾。以下山伏、連卷人、右ニ同。次第、名乗、道行、常ノ通り。半着、セリフ云テ、座へ行キ、下ニ居。太夫出、諷出スト向。太夫、薪ヲオロシ、柱ノ本へ出ルト立、一足出、問答。「色々を四方に」ノ打切ニ一足引テ下ニ居。中入返シニ離ス。太夫幕へ入ルト、其儘、扇ト珠数持替、少シ右へ身ヲ披、眠。ツレモ同。眠様委ク《谷行》ニ印ス。間無構。大小掛ルト、頭ヲ上、扇ヲ指、珠数ヲ右ニ持テ立。角掛テ、「あら恐しの」ト謡。ツレモ同ク角掛テ立。「念誦する」ト諷テ、右ノ手ヲ上、左エ珠数ヲカケ、両手上、合掌シテ「南無や」ト謡。「力を」ト両手ヲ上げ、二人共祈。「給へ」ト祈切テ、手ヲオロシ、脇正面向、立テ居。「顕れ出る」ト太夫ヲ見、二人共キビシク祈出ス。「カケリ」ノ中、《黒塚》ニ同ジ。柱巻ノ後、舞台へ入、ノリ、追時サガリ、直ニ五足出テ償。二人共合掌シテ「東方に」ト謡。「おんころく」ト謡乍ラ立テ、キビシク祈。「そわか」ト祈切テ、左へ踏マワリ、座へ行、太夫ヲ見テ立居。ツレモ同。「威力弥増り」ト珠数ヲ左ニ懸、「珠数さらく」トキビシク祈乍ラ前へ出ル。働ノ中、動キ、《黒塚》ニ委ク印ス。但シ、連ハ不祈。「即身成仏即身」ト追レテサガリ、直ニキビシク祈。付テ行、「祈伏」ト太夫仕手柱ノ本ニ償ト、祈切、左へヒラキ、幽々ト、「行者ハ遙に」ト四五足座ノ方へ行。「不思議や」ト单身ニ

成リテ、フリ返リ、太夫ヲ急度見テ謡。返シニ身ヲ直シ、座へ行、太夫ヲ見テ下ニ居。切ノ「失にけり」ト離ス。

(13) 《葵上》

一、始ニ大臣。出立、立烏帽子、厚板、狩衣、大口、金扇、神子ヲ先ニ立、出。太鼓ノ前ニクツログ。神子ワキ座へ行、下ニ居ト立、右へ踏マワリ、正面向出、太鼓ノ前通りニテ名乗。答拜シテ、左へ披、地謡三番目ノ前へ行、角掛、下ニ居テ神子へ向。「頓てあづさに」ト謡ヒテ離居。後「大方ハ」ト神子へ向テ諷。太夫「打乗隠れ行ふよ」ト太夫太鼓ノ前へ行、下ニ能居ト左へ披乍ラ、狂言ヲ呼出、セリフ云テ離居。脇出立、山伏、大格子、小刀。右ニ扇、左ニイラタカ。狂言、仕手柱ノ本ニテ案内乞時、幕ヲ上サセ、五足出。正面ヲ受テ「九職の」ト謡。「いか成る者ぞ」ト狂言へ向。狂言「大臣よりの御使ニ参じて」ト下ニ居。夫迄ハ立セテ置クベシ。セリフスギテ狂言立、舞台へ入、大臣へ向、下ニ居。「小聖を」ト云時、大臣向。橋掛、短キ時ハ待合行ヘシ。太鼓ノ前へ行。正面向出ルト大臣立。右へ向乍ラ「夜陰と申」トワキへ向。其時脇も問答。大臣「あれ成る」ト正面へ向。見ル。ワキモ同、遠ク見ル。「卒度加持有て」トワキへ向。「さらば卒度」ト大臣へ向、謡スギテ大臣下ニ居。大小前ニ償。扇ヲトリカへ、サカ手ニ持テ指。珠数ヲ右ニ持ト、大小打掛ル。立時口傳。右へ披、

膝ヲ置直シ乍ラ正面ヘ向。氣ヲ納メテ立。小袖ノ前ヘ行。エリヨリスソ迄見下シ、又中迄見返シ、正面向キテ中腰ニ償。「行者は」ト諷。「赤木の」ト右ノ手ヲ前ヘツキ出シ、上テ珠数ノ房ヲ見。「いらたかを」ト珠数ヲ左ヘカケ、左ノ膝ヲ引。单身ニ成テ、「さらりく」ト云時、閑ニ祈出ス。「一祈こそ祈たれ」ト揉切テ、又両手ヲ上テ「東方に」ト祈ル。「降三世明王」ト祈詰ル。太夫右ノ方ヘ出、延廻ルヲ顔ヨリ先ヘ見。立ナガラ両手ヲ上、「なまく」ト閑ニ祈ナガラ太夫ヲ祈リヒシグ心ニテ下ニ償。太夫立トワキモ立、太夫ニ付イテ祈ル。仕手柱ノ本ニテ太夫フリ返ル時、キビシク祈。二ツ追時、跡ヘサカリ、スグニ両手上、太夫ニ付テ祈。太夫太鼓ノ前ニテ、カツキヲ落、橋懸ヘ行。其時、心持有ベシ。太夫、橋懸中程迄行。跡ニ付行、見帰り、急ニ追時、ス【サ】(ラ)くトサガリ、柱巻、何茂同。又太夫ニ付テ橋掛ヘ入。太夫押テ出ル時、跡ヘサガリ、太夫、舞台ヘ入ト、右ヘ披、ノリ追時、神子ノ前迄サガル。太夫小袖ニ取付時、其儘小袖ヲ両手ニテオサヘ、右ノ膝ヲ立、太夫ヲ見テ居。「重テ珠数を」ト左ヘ珠数ヲ懸、「押もんで」ト祈乍ラ立、太夫ノ方ヘ出、祈。太夫働ノ中《黒塚》ニ委ク印ス。「なまく」ト太夫ノ前ヘ出、頭ヲ下ケ願念ノ心持ニテ祈ル。「聴我切者」ト太夫追時、跡ヘサガリ、「智我身者」ト両手ヲ上、祈。太夫ヲ仕手柱迄追詰、「即身

成仏」ト太夫ノエリノキワヲ珠数ニテ打臥セ跡ヘ二足サカリ、单身ニ成テ、太夫ヲ白眼ニテ見償。「読誦」ト左ヘ披立。神子ノ次ニ行、下ニ居。色々口傳有。

一、橋懸長短ニヨリ出様色々口傳有。

一、小袖置様ニヨリ太夫出所違。其時大臣知セ様口傳。

一、太夫小袖ヲ取事有。若シ取タル時ハ取返ス事也。

一、「東方に降三世明王〇なまく」ト謡。此頭両眼ノ頭ト云。口傳。

(14) 《船弁慶》

一、出立山伏。右ニ同。連四人、梨打、白鉢巻、厚板、大口、側次、小刀、金扇。子方ヲ先ニ立出シ、次第、《海人》ニ同ジ、正面向名乗。「扱も」ト子方ニ向。「然共」ト正面向ヘ向。答拜シ、「此は文治の」ト謡乍ラ立廻リ、子方ニ向。子方、正面向ヘ向、謡出スト皆下ニ償。「まだ夜深も」ト謡乍ラ皆々立向。道行、常ノ通り本着。立廻リセリフ。「此所に」ト子方ヘ向。子方座ヘ行、床机ニカ、リ、末ノ連行時、跡ニ付、真中ヘ出、右ヘ立マワリ、仕手柱ノ本ヘ行、狂言呼出シ、セリフ在テ、左ヘ踏マワリ、太鼓座ヘ償、珠数ヲ懐中シ、立テ左ヘマワリ、仕手柱ヨリ、二尺先ヘ出。角掛テ、「正しく静」ト謡。「存候」ト云テ、真中ヘ出。子方ニ向キ償。両手ヲ下ケテ「いかに」ト云。「畏て候」ト頭ヲサゲ、「頓て」ト手ヲ上、右ヘ「静の屋に」ト云乍ラ

膝直シ、立テ、仕手柱ノ本ヘ行。幕ノ方ヘ向。案内ヲ乞。太夫出ルト見、問答。心持口傳。「夫は兎も角も」ト謡乍ラ左ヘ大マワリシテ、末ノ連ノ右ノ膝角ヘ行、子方ニ向、下ニ償。両手ヲサゲ、「いかに」ト云。「畏テ」トヒツシテ、右ヘ膝立替乍ラ右ヘ披。太夫舞台ヘ入ルト見テ、「此方ヘ」ト云テ、正面角掛、能居ル。太夫「武蔵殿を」ト向時、居ナガラ向、謡。「波風も」ノ打切ニ角掛居。子方「いかに弁慶」ト云時、中腰ニ成リテ向。両手ヲ下ゲ、「御前に」ト云。「畏テ」トヒツシテ、「実々」ト手ヲ上、扇ヲ披ナガラ、右ヘ膝立替ヘ「行末」ト立。右ノ手ヲ上ゲ、太夫ノ方ヘ右ノ足ヨリ、三足出。右ノ足ヲ引、右ノ手ヲ左ノ手ニテ持添、「静に」ト謡乍ラ償。酌ヲスル心。口傳。大夫謡ト、扇ヲ両手ニテタ、ミ、右ニ持。「折節是に」ト左ヘ膝立替テ立。笛ノ上ヘ行。償テ烏帽子ヲ両手ニテ持テ立、右ヘマワリ、大夫ノ方ヘ向。烏帽子ヲ見テ、「是を召」ト謡乍ラ、大夫ノ前ヘ行渡ス。又大夫下ニ居ルナラバ償テ渡。少シ跡ヘサガリ、償テ見テ居。但シ烏帽子ノ頭ノ方ヲ左ニ持也。大夫烏帽子ヲ着、扇ヲ取ルト立。左ヘ披キ、本ノ座ヘ戻リ、角掛テ下ニ居ル。舞スギテ大夫ヘ向。「かりの宿りを」ト子方出ル時見ル。「静は泣々」ト大夫ヲ見ル。中入。返ニ離ス。大夫入ルト狂言来リセリフ有テ、狂言行。下ニ居ト立テ右ヘ披ト始ノツレ直ニ立。ワキ大小前（ヘ行）ト一足

出。「いかに武蔵殿に」ト云時、立帰り問答。「一年」ト正面ヘ披キ「以の外」ト少シ右ニ。心持口傳。右ノ足少シ引向。口傳。「今以つて」ノ「て」ニ当テツレニ向。「急御舟を」ト謡乍ラ、大マワリシテ橋懸ノ方ヘ向。連謡中ニ「御舟を出し候ヘ」ト云乍ラ閑ニ出。「立さわぎつゝ」ト太鼓ノ前迄行。足ヲトメ、「舟子共」ト延ル。尤足ハ不浮。地ヘ取ト、左ヘマワリ、直ニ太鼓ノ前ニ償。扇指、珠数取出シ右ニ持。此内ニ座ヘ船ヲ狂言持出。船首ヘサキニ子方乗。床机ニ掛リ、アヤカシ、狂言ノ上、鯉ニ乗。狂言「皆々御舟ニ召れ候ヘ」ト云時、右ヘ披、立テ、船ノキワヘ行、左ノ足ヨリ胴の間ニ乗。角掛下ニ居テ、狂言【と】ト問答。舟中心持口傳有。狂言「あのむこ山ヘ」ト云時少シ上ノ方向ヲ遠ク見ル心持。「必風がヅルガ」ノ「ガ」ノ字ニ当「いかに船頭」ト云ナガラ右ヘ披向。「随分精ヲ出シ「候ヘ」ト云テ、又角掛テ居。狂言、波頭ニツメニ鼓ニ乗テ直ニ立。一足出、向ヲ遠ク見。「あのむこ山」ト謡。「皆々心中に」ト右ヘ披。舟の中、大勢見渡ス心持ニテ「御祈念候ヘ」ト云テ角掛ル。「あゝ暫」トアヤカシニ向。「武蔵ニ御任候ヘ」ト云テ角掛ル。狂言、又波頭踏時、鼓ニ乗リテ、右ヘ段々見マワシ、幕ノ方ヲ遠ク見込、一足出、「あら不思議や」ト謡。心持肝要。子方呼ト、左ヘ披キ向テ償。両手ヲサゲ、「御前に候」ト云。地ヘ取ト手ヲアゲ、珠数ヲ輪ニシテ持、

段々見マワシ、マクカタキツト見ル。「波に浮みて」ト幕ノ方へ向。单身ニ成テ、早笛ノ中見テ居。大夫出ト急度見ル。働ノ中、大夫ワキへ当テ見ル時、左ノ膝ヲ少シ引テ、キビシク見ル。子方、大夫「戦給へバ」ト左ノ足ヲ子方ノ前へ出シ、左ノ手ニテ、子方ノ胸ノ所ヲ押、「弁慶押へだて」ト大夫ヲ白眼ニテ見。「打物」ト子方ヲ見。「まじと」ト左へ珠数ヲ掛ケ、大夫ヲ見テキビシク祈出ス。「北方金剛」ト頭ヲサゲテセメル。「弁慶船子に」ト云時、祈止メ、狂言へ向。「御舟をのけ候へ」ト云テ大夫ヲ見テ居ル。「したい来るを」ト云時、大夫来リ、子方ト又戦。「追拂ひ」ト云時、右ノ足ヲ出シ、身ヲ入テ、大夫ト子方ノ間ヲ珠数ニテ一ツ打拂ヒ、直ニ右ヲ引乍ラ左へ珠数ヲ掛、大夫へ向、祈。「跡白波」ト祈切テ、右ニ扇ヲ持、子方ノ跡ニ付入。又子方ヨリ先ニ右ノ足ヨリヨリ、手ヲ下ゲ償。子方ヨリ其跡ニ付入事モアリ。山伏脇続時、衣装ニ口傳色々有。

(15) 《大江山》

一、出立、山伏、右ニ同。連山伏六人。独武者。脇ノ次ニ立也。一声越シテ出。皆々立向、一声諷。「大江山」ト脇、立マワリ、正面向テ「扱も此度」ト謡。「又名を得たる」

ト独武者正面向謡。「有明の」ト独武者ト向合、道行諷。中ノ打切ニ出ル。「大江の山に」ト立戻リ本着。立マワリ、正面向、セリフ云。「いかに能力」ト狂言ヲ呼、セリフ。スギテ末ノ連ヨリ段々ニ橋掛へ行。裏ノ方【に】(ニ)後ヲ向償居。但シ、立マワル時、正面へ後ヲ向ヌ様スベシ。大夫、大小前へ出、床机ニカ、ルト脇ヨリ段々ニ立テ座へ行。皆々下ニ居。大夫向、問答。「いざく酒を吞よ」ト云時、大夫来リ酌スル時、扇ヲ披請ル。大夫立ト扇ヲタ、ミ、但シ大夫ニヨリ、ワキニ酌サス事有。ニ云合次第。「うち身には」ト大夫ワキノ前へ来ル時、急度見ル。中入迄見テ居。大夫入ト右へ披、狂言ヲ呼、セリフ在リテ皆々中入ス。中入ニ脇座へ台出ス。後出立、サバキ髪・白鉢巻・前後大格子、又唐織ニモ。側次・大口。太刀帯、唐織ノ時無着胴吉。松明右ニ持。応合ナシニ出ル。ツレ、サバキ髪。白鉢巻。無着胴。太刀帯。独武者ハ無袖着ス。脇一ノ松ノ本ニテ、正面向テ、松明一ツ振り、「既に此夜も」ト謡。「空尚くらき」ト座ノ方ヲ見テ、左ノ肩先へ松明ヲ上ゲ、大夫ノ方ヲ見テ、「鬼の城」ト太鼓座へ向乍ラ、後へ松明ヲ捨。「黒金の」ト左ノ膝ヲ立、中腰ニ償。両手ヲ出シ、「押開き」ト云時、左へ押開キ、大夫ノ方ヲ見テ、「見れば不思議や」ト謡。「人の形」ト立テ見ル。「兼而期したる」ト正面へ披、諷。「氏の神」ト跡サガリ償。「南無や」ト両

手ヲサゲ、礼ヲス。「添給へ」ト立、单身ニ成テ、「頼光保」ト独武者ヨリ段々ニツレヲ見渡シ、「心ヲ一つにして」ト身ヲ直シ、跡ヘサガリ、裏ノ欄干ニ腰カケテ居。「劔を飛する」ト立衆一同ニ太刀ヲ抜カマヘル。独武者、太刀ヲ前ヘ付、舞台ヘ入。仕手柱ヨリ五尺先ヘ出、太刀振り上テカマヘ、太夫ヲ見居。「土も木も」ト太刀ヲオロシ、正面向テ謡。「何国か鬼の」ト又太刀ヲカザシ、大夫ヲ急度見。「あますな」ト太刀ヲサゲ、单身ニ成リ、ハシ掛ノ立衆ヲ見渡ス。「切先を揃」ト立衆太刀ヲ前ヘ付、一同ニ舞台ヘ入。独武者、少シ先ヘ出。大小前ヘ三人、独武者ノ次ヘ二人行。大夫ヲ見テ皆々太刀ヲカザス。働ノ中、大夫台ヨリ飛下ルト、独武者前ヘ出。大夫切掛時、一ツ切。大夫ニ付テ一ツマワリ、直ニ地諷ノ前ヘ飛、切戸ヘ入。立衆、大夫来ルト一同ニクハツシ、地諷ノ前ヘ飛。皆々切戸ヘ入。大夫仕手柱ノ本ヘ来ルト、脇太刀ヲ抜、カサシ、脇ノ前ヘ来ルト、右ノ身ヲ入一ツ切、直ニ飛、右ノ膝ヲツキ、左ノ膝ヲ立テ償。大夫ヲ見テ、太刀ヲカサス。又、大夫来ル時、左ノ膝ヲツキ、右ノ足ヲ出ナガラ、大夫ノスソヲ拂、返ス太刀ニテ後ノスソヲ拂ナガラ、向フヘ飛。右ノ膝ヲツキ、左ヲ立、太刀ヲカザシ、太夫ヲ見テ、「頼光保昌」ト謡。「さすが頼光が」ト立、一足出、右ヲ踏出シ、直ニ後ヘ取ツテ太刀ニ左ノ手ヲ添、舞台真中ヘ行。走リカ、ツテ大夫

打懸時、右ノ身ヲ入、一ツ切、直クニ太刀ヲ付テ地諷ノ方ヘ飛、大夫ヲ見テ、「むんずと組んで」ト前ヘ出。大夫ニ飛付、左ノ手ヲ帯ヘカケ、大夫ニ付テ一ツマワリ乍ラ大夫ノ右ノ脇ノ下ヲ太刀ニテ二ツ突き、大夫ニ引レテ台ノキワヘ行。「組伏られて」ト正面向、平座スト大夫、台ノ上ヨリ押付ル。「頼光下より刀を抜いて」ト云時、太刀ヲワキノ下ヨリ拔出シ、切先ヲイカシテ見。「指通シくす」ト脇ノ左ノ脇ノ下ヲ二ツサシ通シ、「ゑいやと返し」ト大夫脇ノ上ヨリ右ノ方ヘ落ルト其儘立。大夫ノ上ヲ飛越、直ニ太刀ヲ振り上テ、大夫ノハラノ所ヲ出、「打落し」ト一ツ切、貞斗正面ヘ向キ、「大江の山を」ト直ニ右ヘ太刀ヲ付テ廻リ、仕手柱ノ本ヘ行。右ノ足ヲ引乍ラ太刀ヲカタゲテ、正面ヲ見。延テ右ヘ披キナガラ太刀ヲオロシ、拍子一ツ踏テ仕留入。

- 一、流儀ニヨリ切違、切組違。能々云合有ベキ事。
- 一、後、幕ヲ上サセ出ナカラ松明ヲ二ツ振事モ有。(出乍ラ二ツ振時ハ一ノ松ニテ一ツ振ル。)
- 一、後黒頭ニテ勤ル事有。其時習有。口傳。
- 一、着テ狂言ヲ呼、セリフ云テ直ニ座ヘ行、下ニ居事モ有。
- 一、一切働、脇心持、身ヲイカシ、顔迄モ替ル程ニ氣ヲ持テ、眼ヲハリ、躰ヲイカス事ナリ。切先ヲイカシ。氣ヲ繁ト云事在。前ヲ廣ク見ル事。口傳。

右ハヨクく心得(マ)ヘギ事ナリ。

(16) 《正尊》

一、出立、大模様。角帽子、沙門。又五條白袈裟ニテモ。鈴掛。大格子。水衣。大口。少刀。金扇。珠数不持。始メ義経・静、座へ出テ居。立所、大鼓右ノ手通り、答拜シ、左へ披、踏廻リ、太鼓座へ行、幕ノ方へ向、案内ヲ乞。大夫出ト見、問答。「稲には」ノ打切ニ立廻リ、大小ノ前へ行、義経ニ向、中腰ニ成、両手ヲサゲテ「いかに申上候。」ト云。大夫、脇ノ右ノ方へ来リ、下ニ居ル。大夫、義経、問答中、手ヲ上、正面へ向テ居。「御錠の如く」ト義経へ向、手ヲ下ル。「土佐坊登ツテ」ト手ヲ上、大夫へ向、「手並の程を」ト小刀ニ両手カケ、急度見ル。尤中腰。大夫諷ト手ヲ放シ下ニ居。大夫起請文読時立テ、笛ノ上へ行、角掛テ居。又脇読時ハ「弁慶に杜ハ渡けれ」ト大夫ヨリ受取、左ニ持。真中へ出、両手ニ上テ読。ヨミ様口傳。打切ニ習有ナリ。「身の毛もよだつて読上げたなり」ト云テ立、笛ノ上へ行、下ニ居。中入後、狂言来リ、セリフ在テ義経へ向、両手ヲ下ケ、「いかに申上候」ト云。「義経是を召されつゝ」ノ打切ニ立テ笛ノ方へ向、玉タスキ取。大夫一声諷時、長刀ヲ右ニ突立、「其時弁慶面々(マ)すゝみ」ト大夫へ向、連諷ト向、問答。「長刀頓て」ノ打切ニ、長刀ヲ取直シ、スクニカマへ持。「込長刀を」トツレノ方へツイテ出ル。「打拂」

トツレ長刀ノ先ヲ太刀ニテ打時、取直シ「受流せば」トツレノマツコウへ打掛ルヲ、ツレ太刀ニテ受ナガス。直ニ取直シテ、スソヲ拂ナガラ、仕手柱ノ先ノ方へ飛。ツレハ裏ヲ通り、笛ノ上へ飛。「はつたと合せ」ト又上ニテ一ツ打合、返ス長刀ニテ、ツレヲスクイナガラ笛ノ上へ飛、直ニ取直シテ打込。尤、右ノ身ヲ入テ打込。スクニ右ノ足ヲ引、長刀ヲツキ立テ居。ツレハクツシテ、太鼓座ヨリ切戸へ入。大夫「馬よりおり立乱入を」ト義経ノ前へ来リテ切組。「正尊カナハシ」ト仕手柱ノ方へ行。「弁慶追つめ」ト後ヨリ長刀打懸ルト大夫振返リ上ニテ二ツ合セテ、「打物抛捨」ト大小ノ前へ長刀ヲ捨。「むんずと」ト組。ワキト大夫ト組合、壱ツ廻リ大夫ヲウツムケニ押付。「其時大勢」ト立衆来リ、繩ヲ掛ルト後ヲ持。「義経ノ御前に」ト其中へツレテ出引スエ、「悦びいさみ」ト大夫ヲ引立、ツレへ渡シ「御門の内へ」ト太コノ前通りニテ正面向、扇ヲ披ナガラ二足サガリ、幽玄シテ留ル。

切組、長刀遣様、身ノ取廻、足カケ共、心ニ懸、工夫有テ(可)勤事。大夫ニヨリ切組違。能々云合可有事。

(17) 《松山鏡》

一、出立、常ノ髪。段熨斗目。素袍上下。常ノ扇持。小刀。衣装、色々口傳有。作物、始ニ舞台先真中へ出ス。子方、大小前へ出テ居。立所、橋掛真中正面向名乗。但シ短キ時

ハ名乗所違フ。答拜ナシ。直ニ子方ニ諷セルガヨシ。子方ノ諷ノ中ニ一ノ松ノ本迄行。子方謡スギテ太鼓座ノ方へ向。「いかに此屋の」ト諷乍ラ舞台へ入。子方立テ鏡ノ前へ三足出ル。脇、太鼓ノ前通り、仕手柱ヨリ一尺程先へ出、子方ヲ見テ、「やあいかに姫」ト諷。子方諷中、立テ聞居。「扱はなからん」ノ打切ニ二人共下ニ居。尤子方へ向テ居。後、「急度思ひ出シたる事の候」ト云、正面へ向、語ル。「立寄見ばやと存候」ト云テ立、鏡ノ前へ行。鏡ヲ（よく）見テ、「されば杜」筋なき事を申候」ト云テ本ノ所へ戻リ立廻リ（下ニ居）子方ニ向。「いかに姫」ト云。子方諷中并ニ地ノ中能ク思ひ入テ（立テ）聞居。「あれ杜母よ御覽ぜよ」ト云時、子方、鏡ニ向キ、右ノ手ノ人サシユビニテ鏡ヲサス。其時鏡ヲヨク見ル。心持口傳。「幼なき身の」ト右ノ手ニテシヨル。返シノ「心なれ」ト手ヲオロシ、子方へ向。「かく哀なる事こそ候ハね」ト立テ正面向。「惣して此」ト諷。「鏡ノ謂を委敷く教へばやと思ヒ候。」ト云テ子方へ向。「いかに姫」ト云。「是を見候へ」ト云テ立。鏡ノ前へ出、扇ヲ披、「扇を写せば」ト謡乍ラ、扇ヲ左ノ肩先へ上テ写シ、「扇ノ影」ト云テ手ヲオロシ、「父が寄れば」ト我が影ヲ写シ、「爰を以つて」ト子方へ向、扇ヲタ、ム。子方ト思ヒ入テ問答。「岸の松咲」ト右へ披諷、「はかなさよ」ト子方へ向。子方鏡ニ向時、思ヒ入テ見。「父ハ泪に」

ト両手ニテ泣ナガラドウト平座シ、泣シヅミ、「我こそは」ト手ヲサゲ乍ラ子方ヲ見。「面目な」ト只ヨリ右へ披、膝立ナガラ立、太鼓座ヨリ、切戸へ入。

一、謡・語・問答、能々文句ヲ思量（量）シ思ヒ入肝要也。專一心中ニ愁傷ノ心持。中々タヤスク可勤脇ニ不非。工夫肝要ナリ。色々口傳多シ。名乗所如此。弟子へハ不教。

(18) 《鳥追船》

一、出立、右ニ同。船、大夫、子方、脇座へ出テ居。立所、太鼓ノ前通りニテ名乗、跡へ一足引テ、「惣して此」ト諷、答拜シテ左へクツロキ、仕手柱ノ本へ行。立廻リ座ノ方へ向、案内ヲ乞。大夫謡ト見ル。「さん候旅人の」ト謡乍ラ真中へ出、下ニ居テ問答。「何と左近尉が」ト少シ気色シテ謡。「夫人の」ト正面向謡。「いはんや十ヶ年」ト大夫へ向。「今日より此屋を明て」ト謡。心持口傳。「何方へも」ト正面へ無気胸ニ向。「明日は舟を浮へ」ト大夫ヲ能見テ中腰ニ成リ、「早々より」ト謡乍ラ立、右へ踏廻リ、中入ス。大夫・子方入ルト、日暮、笠ヲ着、次第二段ニ出ル。但シ出立・仕方、《放下僧》の通り。（狂言ニ太刀持セル。）答拜シ、左へクツロギナガラ、狂言ヲ呼出、セリフ云。「急間早」ト正面向、諷。「あのなだに」ト少シ右へ披、向ヲ見テ諷。「尋て来り候へ」ト狂言へ向。狂言尋ル内、正面向テ居。狂言来ルト向、「見物せう」ト云テ立廻リ、座

へ行、下ニ居。笠次に置。脇正面へ舟出ル。後、出立、前
後段熨斗目ニテモ、又後、大格子ニテモ。素袍花ヤカ成ル
ガ吉。前後、小刀指。常ノ扇指テ右ノ袒^{カクヌキ}揚、子方、大夫先
ニ立、一声越シテ出ル。子方船首、大夫胴ノ間。脇ハ船尾
ニ乗ルト、後見棹ヲ出スト、左ニ持（サケ）正面向テ、
「面白や」ト謡。心持口傳。地ノ中正面向、立テ居。景氣^{ケイキ}
ヲ含心持肝要。「うわの空なる頼みかな」ト謡濟ト大夫ヲ
見、ワキ謡フ。「給ハリ候へ」ト云テ舟ヨリ上リ、棹持ナ
ガラ、太鼓座ノ後へ入、下ニ居ル。「たとい訴訟ハ叶ハス」
ト云時、立棹持ナガラ、大小ノ前へ閑ニ出、立聞スル心持
ニテ「はかなく袖を」ト大夫ヲ急度見テ、身ヲ直シ、「是
は何事を」ト云。「御覽候へ」ト正面へ向。上ノ方ヲ右へ
見廻シ、角掛テ「左近尉が」ト向【タ】（ウ）ヲ遠ク下ヲ
見。「何の為」ト大夫ヲ見ル。「悲しやな」ト云ト其儘右ノ
足ヨリ鯉ニ乗、正面向、立テ居。「打鼓」ノ返ニ下ニ居。
棹置。「すはく村鳥」ト立棹持。「今杜葉が」ト右へ披向
【テ】（ヲ）見テ諷。「先々御休み候へ」ト大夫ヲ見ル。
大夫・子方、下ニ居。脇ハ正面向、立テ居。日暮、角掛テ
立。「鳥追舟」ト諷。「あれに」ト脇正面向ノ船ヲ遠ク見。
「近付テ見うざるにて候。」ト云テ脇ノ方へ向。一足出テ、
「いかにあれ成」ト謡。不向。「あら不思議や」ト云。「あゝ
存外」ト氣ヲ開、内ニイカリヲ含、諷。「さし近付て」ト

左へ披キ、右ノ手ヲ棹ニカケ、「能々見れば」ト日暮ヲ急
度見。「や」ト棹ヲオトシ、左ノ足ヨリオリ、三足出償。
両手ヲサゲ、「扱御訴訟」ト云。日暮、脇ヲ見テ諷。「扱あ
れ成は」ト子方ヲ見テ謡。「又是成ハ汝が母か」ト大夫ヲ
見、子方謡ト向、能聞キテ居。脇此内ニ肩ヲ入、ヒツシテ
居。日暮、「夫弓取の子は」ト角掛テ謡。「いわんや汝ハ」
ト子方へ向。「此方へ来り候へ」ト右へ披、地頭ノ方へ向。
右ノ袒揚、扇指、左ニ太刀ヲ持テ立（廻リ）、二足出テ、脇
ヲ急度ト見テ「いかに左近尉」ト諷。「何とて」ト右ヲ踏
出シ、单身ニ成、太刀ニ右ノ手ヲカケ、白眼ニテ脇ヲ見ル。
ワキ其時平伏ス。「此上はいなとはいかゞ」ト手ヲ放。平
身に成リ、「はやくゆるす」ト右ノ手ニテ、ツバノ下ヲ
持、ツカヲ手前ニシテ、脇へ渡シ、扇ヲ持。ワキ日暮ノ前
へ行、償テ太刀ヲ右ノ手ニテ受取、悦喜ノ心持口傳。スク
ニ跡へ引下リテ償。右ノ手ヲ上ケ、左ヲサケ、礼ヲス。
「扱其後に彼人は」ノ打切ニ日暮・大夫・子方、舞台先ヲ
通り入ル。脇其跡ニ付、仕手柱ノ本へ行。「隠れなき」ト
三人ヲ見送り、「五常正敷」ト正面向、二足出、左へ身ヲ
入テ、太刀ニ左ノ手ヲ添、右ノ手ニテ、太刀ノ下ヲ持。正
面へ見ナガラ（太刀）カタゲテ延。返ニ右へ披キ、太刀ヲ
オロシ右ニ持。一足出、拍子一ツ踏、入。

始、名乗常ノ通り。「惣して此」ト右へ開ク。「当年」ト正面へ直ス。「田面の鳥」ト答拜。踏廻り、橋掛へ行、一ノ松ニテ「いかに此内」ト云。仕手着流女、「あら余所がましや」ト謡。直ニ舞台へ入。子方、下袴ニテ、仕手ニツキ出ル。ワキ橋懸リニテ入替り、子方ノ跡ニツキ、舞台へ入ル。〔図〕 図ノ通り、下ニ居ル。「扱只今は何の為」トシテ懸ル。「花若殿をやとひ申度」トワキ、「自から出て追ふ」ト仕手謡フ。ワキ「いや思ひも寄らぬ事にて候。夫ハ只左近尉が名を御立て候はん為候な」ト謡。此跡ニ「先つ御心を静めて」ト謡。「夫人の留守」ト正面左ノ方へ向。「左近尉が情無き」ト仕手へ向う。仕手、「花若が事」ト謡。「明日ハ」ト立。「早々より」ト謡ナガラ、右へ廻り入ル。仕手「共に涙」ノ打切ニ立、子方ト一所ニ中入。鼓ヲクリ直ニ次第ニテ日暮出ル。《放下僧》ノ通り。但シ笠ハナキ方ヨシ。答拜済ミ踏マワリ狂言呼出。狂言太刀持出ル。橋懸りより舞台ニ入、「御前に候」ト云、セリフ「某訴訟悉く安堵し、只今本国へ罷下り候事、目出度事にては無きか。汝（も）供仕候へ。」シカク。正面向。「急ぐ間程もなく日暮の里に着きて候。又あの灘に当て囃子物ノ音の聞候ハ何事にて有るぞ。尋ねて来り候へ」ト狂言へ向ク。日暮、正面向キ居。狂言、橋懸ニ行キ、シカクアリ。日暮の前ニ来ルト向キ、「夫ハめづらしき事にてある間、暫く見物せうする

にて有ぞ。此方へ来り候へ。」ト座ニ着く。狂言、日暮ノ跡ニ太刀ヲ置キ入ル。作物船出ル〔図〕ハ飯塚注 作り物の船〕（笹三本。上ニカツコ・鳴子。同ツナ下ニ付ル。）仕手、腰巻・水衣肩上ケ、笠着。子方同。水衣、肩上ケ、腰带。ワキ、大口、島水衣、肩上ケ、放髪。一声本越ニテ出ル。船ニ乗り、棹ヲ左ニ持ツ。指声謡。地ノ内、仕手業アリ。「うはの空なる」ト笠ヲ脱キ、子方ニ渡ス。子方受取、下ニ置ク。仕手ノ下ニ居ル。ワキ詞アリ。直ニ上リ、大小ノ後ニクツログ。子方ノ謡ノ中ニ笛ノ上ヨリ出、仕手ノ謡ヲ聞居ル。「是は何事を」トツカクト舞台真中ニ出、「御覽候へ」トワキ柱ノ方ヲ見ル。「左近尉か田」ト目付柱ノ方ヲ見ル。「何のため」ト仕手へ向ク。直ニ船ニノル。仕手モ子方モ立、「思ひくの囃子物」ト一句脇謡。「打鼓」トワキ下ニ居ル。仕手色々業アリ。「すわく」アタリ脇立、「鞞太鼓」ト仕手下ニ居ル。ワキ、右へ披キ、「今こそ某ガ田ノ鳥ハ皆立去りて候。暫く御休候へ」ト仕手へ向ク。此時仕手モ子方モ船ヨリ揚ル。日暮立、仕手真中ニスワル。子方地ノ方へ居ル。「差近づけて」ト竿ニ右ノ手ヲ懸ケ、日暮ヲ見、「や」ト竿ヲ落ス。直ニ船ヨリ上リ両手ヲ付、「此は日暮殿」ト謡。「扱御訴訟」ト面ヲ見ル。「夫弓取の」ト日暮正面。「況や」ト子方ヲ見ル。「此方へ来り候へ」トクツログ、右ノ肩ヲヌキ、太刀ヲ左ニ持。ワキニ向キ、此

時子方立。「何とて物をば申さぬぞ」ト太刀ニ手ヲ懸ケル。此時仕手「暫く」トワキノ前へ出ル方ヨシ。申合スベシ。半ユリニ日暮、手ヲ離シ、正面へ向ク。「小田守」ト太刀ヲワキへ渡ス。ワキ此時手ヲ上げ、スラ／＼ト行キ、太刀取、右ニ持、跡へサガリ、手ヲツク。此時日暮肩ヲ入ル。「扱其後に」ト日暮入。ワキ跡ニツキ入。此時、シテ、子方ヲツレ入レル。仕手扇ニテサシ、柱ノ本ニテ、廻リ返シ披キトメル。ワキ、子方ノ次ニツキ、橋懸リニ行キ、「五常正しき」ト太刀ヲ見。右ニカタゲ披ク。返シニ入ル。

(19) 《角田川》

一、出立、右ニ同ジ。但シ小刀不指。クスマタルガヨシ。作物ニ子方入テ、始ニ大小前へ出ス。立所太鼓ノ前通りニテ名乗。「此間の」ト右へ披キ諷。「旅人の」ト正面へ向。答拜シテ笛ノ上へ行、角掛下ニ居。男出立、常ノ髪、無地のしめ、大【臣】(口)、掛柏スラク、墨絵扇、少刀。次第一段ニテ出ル。立所、大鼓・太鼓ノ間。次第・名乗・道行、常ノ通り本着。立廻リ、セリフ云テ、ワキノ方へ向。「いかに船頭殿」ト云時、ワキ立テ男ニ向、一足出テ問答。「又跡ヨリ」ト幕(ノ)方ヲ遠ク見テ諷。「何事にて」ト男へ向、問答スギテ、角掛下ニ居。男、ワキ座へ行、下ニ居。太夫出不見。「童も其船に」ト云時、立向一足出テ問答。太夫「あれに白き鳥の」ト角掛ル。ワキモ角掛向ヲ遠ク見、「あ

れ杜沖の」ト云。「かもめ候よ」ト太夫へ向。「我も又」ノ打切ニ下ニ居、地ノ方へ向。右ノ祖ヲ揚挟ンテ(ハサマヌカヨシ)左ニ棹ヲ持チ「夫は難波江」ト云時立テ右へ披キ角掛立テ居。「去りとは渡守」ト太夫会釈ノ時向、「かゝるやさしき狂女こそ候ハね。さあらバ舟に乗り候へ。」ト云ト大夫先へ出時、「構て舟の内にて物に狂ひ」ト大夫ヲ見ナガラ諷。大夫地頭ノ前通り下ニ居ト、四五足出、大夫ノ跡ニ立テ、男ニ向、「いかに」ト云。男立テ大夫ノ次ニ正面向、下ニ居ト直ニ問答。ワキハ男ヨリ少シ右へ寄、正面向、立テ居。口傳。「あの念仏ニ付て」ト男ヲ見ル。「さあらバ御物語候へ」ト云テ正面向、能ク氣ヲ治メテ語り出ス。「や、しかも」ト内デ謡見ル。「なふなんぼう」ト男ヲ見ル。「商人」ト男ニ断ル心。「去共く」ト次第ニ顔ヲ上テ正面向向諷。押テ謡ベシ。「終に事おハつて」ノ「お」ノ字ニ当テ男ヲ見。「去共く」ト重ク顔ヨリ上、正面向向。「此舟中を見申すに」ト男ヨリ段々大勢乗リタル様ニ正面向見渡シ、「や」ト正面向向時舟ノ岸ニ当リタル心ヲ持テ、氣ヲ替へ、目ヨリ先へ見テ、直ニ左ノ手ヲ一寸ト見ナガラ右ノ手ヲ棹ニカケ、正面向向テ单身ニ成リ、「長物語リニ舟が着いて候」ト手ヲオロス。「時節ハ此方より」ト男(ヲ見ル。男)立テ座へ戻リ下ニ居。太夫オリヌヲ見テ、「いかに狂女」ト云。大夫ト問答。心持口傳。「其稚き者杜

此物狂ひが子にて候へ」ト云時、棹を捨、直ニ償、思ヒ入テ太夫ヲ見。「扱は御身の」ト諷。「此方へ御入候へ」ト云テ太夫ノ右ノ方へ出、償。両手ニテ太夫ヲ誘立テ价錯シ、舟ヨリオロス風情ニテ、作物ノ右ノ角迄ツレテ行、手ヲ放シ、跡へ下リ、太夫ヲ見テ、「是こそ彼の者の墓所にて候へ」ト云テ下ニ居。口説ノ内、愁傷ノ心ヲ含テ聞居。「残りても」ノ打切ニ立、左へ披キ、笛ノ上へ行、償。肩入、鉦鼓ノ紐ヲ輪ニタクリ、鉦鼓ニ添へテ、左ニ持、右ニ鐘木ヲ持。「実目の前の」ト云時右へ披キ、角掛テ立。一足出、「既に月出」ト謡。「鉦鼓を鳴らし」トニツ打。但シ「面々ニ」ト大夫へ向。打様口傳。「うたてや人々」ト角掛テ見ル。「母の弔」ト大夫へ向、「鉦鼓を母に」ト大夫ノ前へ出償。鐘木ヲ大夫ノ右ノ手へ渡シ、鉦鼓を左へ渡シ、跡へニジリ下テ、此時ニテ扇ヌキ持。中腰ニ居テ問答。又鉦鼓ヲ大夫ノ首ニカケル事有。云合次第ナリ「一筋に」ト作物ニ向合掌シテ「南無や」ト諷。地へ取ルト手ヲオロシ、作物ヲ見テ能ク居ル。大夫「なふく今」ト云時向。「正敷此塚の」ト作物ヲ見ル。大夫謡フト立、笛ノ上へ行、下ニ居。「見へつ隠れつ」ト角掛ル。ワキハ皆々ノ跡ヨリ入ル。衣装色々傳有。

一、語ノ中 語ル前ニ能息ヲシテ氣ヲ治メ、幽々ト語出也。突息・還息。息ノ間ヲユルリトシテ氣ヲセラヌニ諷へシ。

調子余リ高キハ悪シ。中高ニ少シ高ク謡へシ。序破急問答ノ中、口傳色々有リ。(五十以上ノ時、紺無地のしめ、素袍ノ下ハカリニテモ。)

(20) 《安宅》

一、出立、常ノ髪。段のしめ。素袍上下。小刀。常ノ扇。又梨打。白鉢巻。厚板。直垂上下。込大口。金扇。小刀ニテモス。狂言太刀ヲ持。ワキニ付キ出ル。立所太鼓前通り。答拝シ、左へクツロギ、狂言ヲ呼出シセリフ有テ座へ行、下ニ居。大夫出テ後、判官脇ノ前来ル時少シ跡へ下ル。「よろくとして歩給ふ」ト云時、狂言来リ、「山伏達の御通りにて候」ト云ト向キ、答テ立、一足出、大夫向、問答。「頼朝義経御中」ト正面角掛テ諷。「去間」ト大夫へ向。「殊に是ハ」ト左ノ足ヲ引、右ヲ踏出シ、橋掛末ノ連迄大勢見渡シ、「一人も」ト身ヲ直シ大夫へ向。「夫山伏」ト云時、脇正面向、立テ居。「数珠さらくと押もめば」ト大夫へ向。「近比」ト云。「夫つらく」ト云時、太夫ノ左ノ方へ三足出、義経ヲ見込、立テ居。心持口傳。「関の」ト正面ヲ見。「人々」ト左へ披、座へ戻リ、大夫へ向。「急て御通り候へ」ト云ト、ジキニ「判官殿の御通りにて候」ト云時向。答ナガラ右へ披キ、下ニ償。右ノ袒裼、左ニ太刀ヲ持テ立。判官舞台へ入ヲ見カケ、三足出ナガラ「いかに是成強力留れと杜」ト单身に成リ、太刀ニ右ノ手ヲカケ、

判官ヲ白眼ニテ見ル。「是ハ此方より」ト手ヲ放シ、大夫
へ向。「旁は」ト太刀ニ手ヲカケ、单身ニナリ、狂言、太
夫ト脇ノ中へ入。脇ノ右ノ肩ヲ両手ニテ押へ止メル。大夫
跡へ下ル時ハ出、太夫ヨリ押テ来ル時ハ跡へサガル。能々
ニ云合ベシ。「恐れつびよう」ト右ノ手ヲ放シ、「近比あやま
つて候。早々御通り候へ」ト云テ太夫ノ右ノ方ヲ通り、太
鼓座ヨリ大小ノ後へ入、肩ヲ入居。「理り給ふべき」ト云
時、立テ橋掛一ノ松ノ本へ出、正面向、立テ居。諷過テ、
左へ披キ、狂言ヲ呼、セリフ云。狂言行ト又正面向テ居。
狂言来リ「かう御通」ト云時向。舞台へ入ト、太夫立ツ時
向。「先にハ」ト云テ、表ノ方ヲ通り、座へ行、下ニ居。
「あやしめらるな」ト云時離ス。「鳴ハ滝の水」ト云時太夫
来リ酌ヲス。其時扇ヲ披キ請テ「関守請持て候。一指御舞
候へ」ト云テ扇ヲム。舞不見。過テ向。「暇申て」ト太
夫礼ヲス。是ヨリ不見。素襖・直垂脇ツゞク時、衣装口傳。

注

1 西野春雄 「能界展望（平成10年）」 「能楽研究」

第24号 法政大学能楽研究所 平成12年三月発行 31頁

〔付記〕

貴重な資料の閲覧・翻刻を許可頂きました高安
流協方の藤野藤作師、飯富雅介師に心より感謝致します。

また貴重な御教示を頂きました筧鉦一師に心より感謝致し
ます。本稿は平成十六年度科学研究費助成基盤研究（C）
による成果の一部となります。